

● 医学部・医学系研究科での教育

医学部および医学系研究科は、人間の病気に関連する学問を研究し教育するところ。最も我々の日常生活に密接に繋がる学問分野であるとも言えます。人間の体は小宇宙と呼ばれます。遺伝子から始まり、様々な蛋白、細胞が見事なバランスで協調し一つの体が形成されています。しかし、その個体は同時に心を持ち、思考、感情をも持つ独立した人格でもあります。このことから、医療は病気を治すだけでなく、病人をも治すことが求められている理由が容易に理解できると思えます。従って、医師となるものは人間性豊かで教養もあり、その職業に使命感を持つものでなければなりません。医学部では、学生諸君に広い視野で医学というものを考えてもらいたいと念願しています。今年度から教養二年の秋学期に医学部全体で医学序論「医の原点」と題して、聖路加国際病院の日野原重明先生、上智大学のアルフォンス・デーケン先生、本学元総長の森巨先生、本学先端科学技術研究センターの福島智先生など九名の先生方をお招きして、医学医療における根本的な問題を学生も教職員も一緒に考える機会を持つことができました。このような教育改革は医学部において全面的に行われており、介護実習、研究室配属、チュートリアル教育、クリニックシップ、基礎臨床統合講義などの新しい教育手法が取り入れられており、また、医学英語の必修化など学問の国際化にも対応しています。

医学部の卒業生は毎年一〇〇名になります。多くの学生はまず臨床研修をし、その後、専門の診療科を決めることとなります。基礎医学の大学院は平成十年に発足した医学修士課程の学生、及び他学部の修士課程を修了して入学するものと基礎医学志向の医学部卒に分けられます。平成十二年より、医学部にPhD・MDコースが誕生し、医学部の四年終了後に博士課程に入り、その後希望すれば復学して臨床を行うことができます。このように、医学士の進路に多様性が生じています。医科学修士課程

教育・研究の現場から

大学院医学系研究科・医学部

Graduate School of Medicine and Faculty of Medicine

桐野 高明 大学院医学系研究科長・医学部長

Home Page : <http://www.m.u-tokyo.ac.jp/>



東大病院全景 (2002年3月)

は広く全国の四年生の学部卒の応募者から一〇名を選考しています。博士課程では、各講座に直接入り、そこでの実験が中心となりますが、週に一回、共通講義(神経、免疫、遺伝子工学、社会医学など)が行われ、また、電子顕微鏡、組換えDNA技術、免疫組織化学などの集中実習に参加することが出来ます。

● 医学系研究科・医学部
附属病院での研究

医学系研究科の基礎系には分子細胞生物、機能生物、病因・病理、生体物理学、脳神経、社会医学、健康科学・看護の七専攻及び国際保健の独立専攻があります。研究内容を一言で表すと、ヒトの命を守り、健康を増進し、さらにヒトを中心とした生物機能の基本原理を解明するということに尽きます。研究のレベルは高く、一流の国際誌に数多くの論文が発表され、また、教官でその編集の役割も務めているものも少なくありません。医学生物学はこの百年間最も進歩した学問の一つであり、人工臓器開発、脳機能測定などの領域では理・工学部等との新しい連携が不可欠です。また今後は、文学部、教育学部、法学部などの人文社会系との接点も益々多くなっていくでしょう。

東京大学大学院医学系研究科・医学部はサイエンスにおいても日本をリードすると同時に、患者の立場に立つことのできる心豊かな医師あるいは優秀な研究者を多く輩出させることが使命であります。医学系研究科の臨床系には内科、生殖・発達・加齢、外科の三専攻がありますが、基礎・臨床の役割分担は必ずしも明確に区分される訳ではありません。臨床系では疾患に関連した分子機構の研究から治療法の開発まで幅広い研究活動が行われています。これにはベースのしっかりした大学附属病院が必要ですが、幸いにして平成十三年九月にオープンした新入院棟はその規模や設備などあらゆる面から国際的レベルをクリアするものであり、その役割がますます重要となっております。



新入院棟 10階のカンファランス



手術見学 (心臓外科)



「医の原点」講義 森巨 元東大総長

● 情報の不思議

情報とは不思議な存在です。それ自体としては形や質量があるわけではありません。けれども情報は、産業技術を進展させ、巨万の富をもたらします。あるいは、人を痛ましきまでに傷つけ、時によっては、国家の存立を脅かすことさえあります。そもそも、私たちの生活すべてが、情報によって生きています。経済や行政はもちろん、社会のさまざまな組織や活動、さらには私たちの日常生活、それらがすべて情報の上になり立っているのです。遺伝子情報という言葉にも見られるように、人間の生物的存在そのものも、情報に基礎を置いています。

こうした情報の性格を考えると、情報を学ぶということとは、人間・技術・社会のあらゆる分野にかかわっています。それは、つまり、情報に関する学問は必然的に、学際的なものになるということです。また、逆に言えば、情報に関する学問は、情報という切り口を通して、人間・技術・社会の姿を総合的に理解し、それらに実践的にかかわろうとするものである、ということでもあります。情報化社会が成熟に向かいつつある中で、私たちが育てたいと考えているのは、そういう取り組みができる人たちです。

● 情報と学際的組織

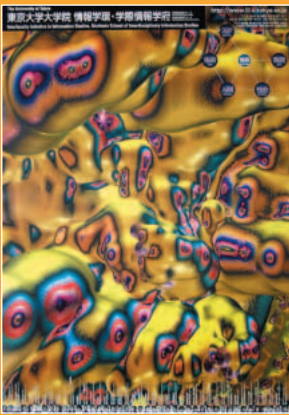
このような性格をもつ情報の教育・研究に、文系・理系の枠を越えて取り組んでいる情報学環・学際情報学府は、二年前、つまり二〇〇〇年という新たな時代の幕開けとともに誕生した組織です。この組織には、これまでの研究科と異なつて、情報という学問対象を学際的に扱うにふさわしい、さまざまな工夫が盛り込まれています。一つは、研究組織（情報学環）と教育組織（学際情報学府）の分立の仕組みであり、これによって、研究面では先端的・融合的な研究の集中的深化を、教育面では幅広い教育カリキュラムの充実を図っています。もう一つは、流動教官の仕組みです。情報学環に所属する教官のおよそ三分

大学院情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

濱田 純一 大学院情報学環長・学際情報学府長

Home Page : <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>



の二が、学内の他の研究科・研究所から一定の期間を定めて移ってきています。これによって、さまざまな分野で情報にかかわる学問的活動を行っている教官が一堂に会して学際的な教育・研究に従事し、また、流動期間の終了後は、そうした学際的な経験を、一元の部局に持ち帰ることができるわけです。

こうした流動教官を送り出している組織は、教育学研究科、総合文化研究科、工学系研究科、医学系研究科、情報理工学系研究科、東洋文化研究所、社会科学研究所、社会情報研究所、生産技術研究所、史料編さん所です。このほか、教育課程では、人文社会系研究科、法学政治学研究所、医科学研究所、情報基盤センターのスタッフも授業を担当しています。

● 共通言語としての情報

教育組織である学際情報学府には、文理融合型の情報学研究者・表現者の育成を目指す「学際情報学コース」と、高度な専門的職業人養成を目指す「実践情報学コース」が設けられていますが、この学問分野の性格を反映して、学生の研究テーマは多彩であり、また社会人の数の多さも特徴です。

情報を学ぶ視点の多様さは、情報が表現される様式がさまざまであることのアラわれです。情報は技術や権利に体化されます。また、情報は、言語や身体表現、あるいはメディアやアートという形でも現れます。私たちの組織は、コンピュータ・グラフィクスなどアートの世界も正面から取り上げようとしている、東大では珍しい場所です。情報学環では、これらのテーマを、「生命」、「システム」、「表現」、「人間」、「社会」という五つの分野に配置して研究を行っています。情報というものは、そもそも、さまざまな学問分野を貫く共通言語となる可能性をもっている概念です。情報という概念は、現代の多様な知の総合を生み出す媒介としての役割を果たしているのです。学際情報学府では、従来の学問の枠にとらわれず、情報に対する幅広いセンスと総合的な力をもった学生を育てたいと考えています。



開発された TRON コンピュータ

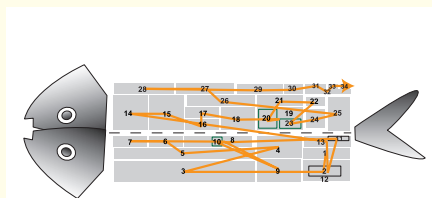


図6 Kの5月の推移図(身側)

鯨の情報を身体的行為から描く



ガラス乾板画像のデジタル色彩復元